

歴史は物語りではいけないのか

——アメリカ地域研究系歴史家による歴史哲学への接近の試み——

川 島 正 樹

はじめに——本稿執筆の背景

(1) 歴史ブームと「歴史修正主義」

まず本稿執筆の動機と本稿で取り組む課題について概略する。本稿の公刊時点で筆者は南山大学における常勤教員として最終年度を迎える。外国語学部英米学科のアメリカ史（「アメリカ合衆国の歴史」と同義）担当教員として、また入学したての学生を主な受講生とする全学共通教育科目の「歴史の諸相2」授業を本学で四半世紀担当した経験を踏まえて近年の気になる学生の反応を挙げれば、第一に「歴史とは解釈次第で変わるものである」といった、ある意味でポストモダンの風潮に重なる歴史学習への否定的な眼差しである。かつて中国の文化大革命が掲げた「造反有理」に呼応した全共闘世代の末裔に連なる本稿筆者としては、固定概念を打破する相対主義の浸透は本来的には喜ぶべき現象の筈である。

だが当然のことながら、歴史学の講義を生業とする本稿筆者は、学生たちがしばしばあからさまに示す上述のような発言に穏やかではいられない。この思いが募っていた矢先に、ある同業者による、「冷戦崩壊後いまだ見えぬ秩序」を嘆きつつも、歴史の研究と学習の意義の再確認を呼びかける一般向け書評記事に目がとまった [小田中 2022a]。新たな世紀に入って四半世紀が過ぎようとする今日、同記事筆者によれば「国内外で歴史ブーム」が起こっているという。例えばユヴァル・ノア・ハラリによる一連の分厚い著作が世界中で空前のベストセラーとなり、かつて歴史学徒の必読書であった E・H・カーの『歴史とは何か』の新訳版が出されて人気を博している [ハラリ 2017; カー 2022]。その一方、各国間で国民レベルの歴史認識のずれをめぐって「記憶戦争^{メモリー・ウォーズ}」というべき厄介かつ深刻な事態が生じている。その最も衝撃的な象徴的事例は、本稿筆者が担当する全学共通教育科目「歴史の諸相2」の授業冒頭でも映像資料と共にエピソードとして触れられる、我々日本人一般には歴史的事実としてその実在性が疑われない「ホロコースト」を「なかった」と一刀両断に否定する国際的陰謀勢力を背景とした多額の費用を要した「名誉棄損」の裁判闘争である。近年本稿筆者は当事者の歴史教員の著作とそれを忠実に映像化したドキュメンタリー風映画を冒頭の諸注意の直後に鑑賞させることで、この問題の重大性を受講生に実感してもらうことにしている [リップシュタット 2017; ジャクソン 2018]。

冷戦後の世界には、フランシス・フクヤマ（1952年生）が期待した自由民主主義的資本主義の最終的な勝利による「歴史の終わり」が訪れるどころか、自由主義と民主主義という伝統的価値を掘り崩すポピュリズムがアメリカ合衆国（以下「アメリカ」と略記）を含む所謂「先進諸国」でさえ横行し、国民の分断が深刻化し、既述の如き「記憶戦争」が各地で頻発している。このような

当初想定外の状況が進行する中、フクヤマも自身も自らの信念の動揺を隠さない [フクヤマ 1992 ; Fukuyama 2017]。

(2) 欧米でのポピュリズムの隆盛とビッグヒストリーの流行

本稿筆者（1955年生）を含む戦後世代の歴史家に多くの影響を与えたE・H・カー（1892-1982年）が指摘した、同時代の歴史状況が歴史家に多大な影響を及ぼすという見解に、本稿筆者も大いに同感を覚える。我々の世代は次のような青年期から壮年期を経て老年期に至るまでの世界史的な変動を概ね共有する。中国の文化大革命と呼応した全共闘運動の収束後、ニクソン・ショックとベトナム戦争からの撤退が象徴するアメリカの覇権が揺らいだ後に、「四人組」の粛清や二つの「天安門事件」を経て「文革」への幻想は打ち砕かれた。「ベルリンの壁の崩壊」や「ソ連解体」による冷戦終結を経てアメリカの一極覇権の時代を迎え、二度の湾岸戦争や衝撃的な映像を伴った「9.11事件」の後、「自己責任」論を叫ぶ「新自由主義」の高揚を経験した。しかしながら、2008年秋の所謂「リーマン・ショック」を契機に1930年代の再来と言われる世界的な「大不況」に見舞われ、11月の大統領選挙で誕生した「黒人初の大統領」のバラク・オバマ政権の努力で再選までの4年間で不況は克服され、自由と民主主義の価値観への信頼は持続した。その間に北朝鮮が核実験を伴う長距離ミサイルの開発に成功する一方、中国が軍事的な地域的覇権確立への意志を見せつけながら経済力を急激に増進させ、東アジアの政治情勢は不安定化^アした。現在に直接つながる転換点は2016年だった。まず6月に保守党政権下のイギリスでEU（ヨーロッパ連合）離脱の是非を問う国民投票の結果、大方の予想に反して離脱派が勝利した。続いて11月に行われたアメリカの大統領選挙では同じく事前の予想を覆して排外主義的な「アメリカ第一主義」を掲げるドナルド・トランプ候補が僅差で勝利し、EU加盟国の多くでも排外主義的で分断を煽る傾向が目立つポピュリストに類する政治勢力の台頭が目立つ、民主主義の変質が表面化する時代を迎えた。その後は読者諸氏がご存じのように、コロナ禍の下で米中対立の激化とロシアによるウクライナ侵攻に伴う核戦争の危機が高まる現在に連なる。我々の世代は極端に思想の軸が揺れ動く時代の波に翻弄された。青年期から壮年期にかけて社会主義への希望と絶望に襲われ、自由民主主義への確信も崩れた後、今コロナ禍と核戦争の可能性の高まりという身近な危機感の切迫の中で、不安な老年期に差し掛かっている。

冒頭で触れたように、近年目立つ傾向の一つに、現生人類の誕生から現代に至るまでの、従来の世界史の通史や概説本をはるかに凌駕する極めて長期的な視野に立った、ハタリ^ハの著作に代表される「ビッグヒストリー」と呼ばれる概説的歴史書への関心と需要が高まっている¹⁾。既述のような価値観の大きな変化にさらされた挙句に心許ないまま「終活」を強いられる本稿筆者の世代に属す歴史家は概してハタリの『サピエンス全史』の刊行と世界的ベストセラー化を歓迎した。その理由の一端は同書の読了後に未来への新たな希望の光が見出しうるからである。同書で特筆されるべきは、個々人の身体能力と大脳容量では勝っていたネアンデルタールではなくホモ・サピエンスが今日の隆盛に至った背景を「虚構」の創造性にあると見抜いたことである。注目すべきは「人権」すらもその「虚構」に含まれるという点である。つまり、未来により幸福な状態をもたらさうと多

1) 「本当のところ人類はどこからきてどこへ向かおうとしているのか」という壮大なテーマを掲げる「ビッグヒストリー」は自然科学分野でむしろ関心が高い（「ビッグヒストリーの概要と学び方」https://www.akashi.co.jp/files/books/4421/4421_sample_p001-009.pdf）。

くの構成員に確信させうる虚構の広範な共有とその実現に向けた協働作業のための組織化力が今日までの人類の歩みの鍵なのである [ハリ 2017]。マルクス主義史学が未来のより幸福な社会実現に向けた虚構の形成においてかつて有した共同幻想の神通力を喪失した今、歴史研究の底流を一貫して形成し続けてきたランケ流の実証主義的傾向が歴史家に細かな専門分化をもたらし、人類の歴史の長期的な流れが歴史家においてすら見出し難くなっている。ハリに代表される若い世代の有能でかつ勇敢な歴史家による壮大な人類史の物語りの試みが出版市場で証明した商業的成功は、「科学」の名の下に意義を俄かに見出し難い個別実証主義に逃げ込み閉じ籠る傾向が否めない本稿筆者と同世代の歴史研究者に一般社会から突き付けられた、ある種の「ダメ出し」であると解釈すべきである。

(3) コロナ禍とロシアによるウクライナ侵攻の衝撃

上述の如く、ハリが提起した現生人類の起源から語られるビッグヒストリーにはほんやりながらも人類の明るい未来社会像が示唆されている。それは本稿筆者を含む同世代が冷戦終結からほんの少し前まで共有していた未来への楽観的な思想状況を反映していた。それがよく示されているのは、2020年4月に『朝日新聞』が掲載したハリへのインタビュー記事である。コロナ禍の猛威の下で急激な感染者と死者の増加に苛まれていたアメリカやイタリアと強圧的な都市封鎖という強圧手段で短期的な成果を上げていた中国の中間に位置して、感染者の隔離と経済活動の両立に苦慮しつつも何とかバランスを保っていた日本と韓国と台湾をハリは率直に称賛した [ハリ 2020]。

だが間もなく、そのような未来社会や人類が歴史的に蓄積してきたハリが言うところの「虚構」のうちで最も好ましいとされる人権概念や国連憲章に代表される武力侵略放棄原則に基づく平和の恩恵への信頼の持続という暗黙の前提を根底から覆す出来事が起こった。現地時間 2022年2月24日に開始され、本稿執筆時点で終結の目途が全く立たない、国連安全保障理事会常任理事国の一角を占める核保有大国のロシアによる突然のウクライナへの武力侵攻である。人類史の明るい未来への共同幻想は脆くも崩れ去ったのである。

本稿筆者が一歴史家としてこのロシアによるウクライナ侵攻という歴史的な重大事件に居合わせる観察者として特筆すべきであると考えられる事実は二つある。まずロシアとアメリカを筆頭とする NATO (北大西洋条約機構) の双方ともにウクライナの反撃潜在力を過小評価していた点であり、第二にブチャにおけるが如き一般民衆への大量虐殺や恒常的な民間施設を標的としたミサイル攻撃などのロシアによる公然たる戦争犯罪である [小泉 2022]。後者に関して本稿筆者には、かつて第二次世界大戦の欧州東部戦線戦における「絶滅戦争」としての独ソ戦を経験したロシアが今度は加害者に転じた感が否めない [大木 2019]。それはホロコーストの被害者である筈のイスラエルの保守強硬派が「テロリスト」と見なす被占領地難民一般に対して容赦なく行う弾圧に酷似している。前者に関してはアメリカ史家として本稿筆者は付言したいことがある。それは後述する本稿の主題と重なる歴史研究の結果として得られる歴史の法則性に類する知見の一つに関係する。略述すれば、外国の地に武力で侵攻した際には撤退を強いられる結果に終わるという失敗の事例の方が、とりわけ長期的視点に立った時、「成功」の例よりもはるかに多いという事実である²⁾。日本軍が中国大陸

2) 本稿筆者が専門とするアメリカ史に例を採ればアメリカ独立革命戦争がまず想起される。英国はスペイン無敵艦隊を撃ち破り、オランダを屈服させて「ニューアムステルダム」を「ニューヨーク」に変名し、フランス陸海軍を

で当初予想をはるかに上回る膠着状態に苛まれて勝利の見通しが立たないままに遂には日米戦に突入するのも、アメリカ軍がベトナムから最終的に撤退を余儀なくされたのも、押しなべて被侵略者における「民族主義」³⁾の威力を過小評価して単純に武力や残虐行為のみで外国勢力が住民を抑え込もうとして強烈な反発を買ったからである [川島編著 2015：序章]。

その一方で、無謀と思われる開戦に踏み切った独裁者に対して、ロシアの民衆の大半が応援しているばかりか、我が国や NATO 諸国にも相当数の支持者が存在している事実是否定され難い。その理由の一端には、「新自由主義」の席卷によって「自己責任」論が幅を利かせる、未来の担い手たる子どもの将来にかかわる社会経済的な格差の拡大が如何ともし難い一方、所謂 LGBTQ を含む少数派の権利が「過度に」優遇されているとする不公平感に根差す、リベラル派エリート主導の「近代化」への、民衆レベルの根深い反発が含まれることは間違いない [東&小泉 2023]。

(4) 本稿で取り組まれる課題

本稿では歴史研究における演繹的な理論の設定ないし前提的な法則を追究することの是非を問う。換言すれば歴史哲学という歴史家が一般に忌み嫌う学問分野に関する、歴史家からのアプローチである。本来的に実証性を第一に掲げる、帰納的に確定的事実を積み上げる実験系自然科学に類似性を持つ歴史学という学問分野においては、理論教育はほとんど行われず、ひたすら厳格な実証性が尊重され、歴史的事実の科学的追究の度合いを実証性の確度と同義とする厳密な職人的訓練が施される。そのゆえもあって歴史家からの歴史哲学的なアプローチは試みられないどころか忌避されてきたのである。この学問風土も影響して、通史的な概説書の類は単著よりも諸専門分野から多数の歴史家を集めた協働作業となることが世界的通例である。歴史家でありながら歴史観を問われる概説的なまとめ努力が求められるのは大学の概説史の講義くらいであり、ごまかしがきく程度にしか必要とされないという実情がある。本来的に帰納的で詳細かつ丹念な実証作業に基づく歴史研究においては、最終目標であるべき歴史観の提示、すなわち歴史理論の確立を真剣に試みる以前に、個別実証主義に追われる中で我々大学の歴史教員の大半は退職の時期を迎えてしまう。本稿筆者は

圧倒したという点で、当時世界最強の軍事力を誇っていたことは間違いない。そのような軍事力を背景に最初の見せしめ的な弾圧を英本国から受けていたマサチューセッツ植民地の中心都市ボストンの民衆が 1775 年 4 月 19 日に武力反抗を試みた時点では誰も勝利に確信がなく、独立を志向することになる所謂「愛国派」は 13 植民地全体でも 4 割程度で、2 割の「英国忠誠派」を除いた残り 4 割は様子見を続ける「中立派」であった。中立派が雪崩をうって愛国派に与するに至るのは各地で住民に対する集団的虐殺を含む英軍の残虐性が顕著になり、身近に生命の危機が迫ったり、怒りが高まったりしてからである。当初は様子伺いをしていた他の 12 の植民地の指導層が目当たりにした「見せしめ」への恐怖を乗り越えて「明日は我が身」という確信が一様に浸透し、13 植民地が一致して「独立宣言」を発するまでに最初の戦闘から 1 年と 3 カ月ほどの時間が必要だったのである。当時の非正規軍主体のアメリカの独立派には、英国に積年の恨みを抱くフランスなどの西欧諸国から応援が寄せられた。こうして 8 年の苦闘を経て英国軍は撤退を余儀なくされ、アメリカの独立が達成された。その少し後に西欧で起こるフランス革命の後に欧州を席卷したナポレオン軍を最後まで手古摺らせたのは「ゲリラ」の語源となったスペインの民兵であった。彼らの象徴的な有様はゴヤの一連の「黒い絵」で描かれた通りである。

- 3) これらは押しなべて「ナショナリズム」というよりも“patriotism”と呼ぶべきである。語源的には自然発生的で土着的な民衆による「父祖伝来の土地への愛着」すなわち「郷土愛」を意味するこの用語を国家主義的な「愛国主義」と和訳することに本稿筆者は違和感を拭えない。近代史を通して見られる民衆の組織的武力反抗は一般的に外部からの侵略後に始まる。

通史的な共同執筆作業の大変さを早々と経験して以降に単著の教科書的な概説書の刊行を日英両語で試みる機会に恵まれた [川島 2014; Kawashima 2017]。それ以来、何のために歴史を学ぶべきなのかといった受講生から多く寄せられる問いへの回答努力と重なる、歴史理論や歴史哲学へのアプローチの必要性を痛感してきた。本稿は退職を前にした、アメリカ地域研究という学際性を謳う教育課程に所属する一人の先輩歴史家による、同業若手世代へのささやかな貢献のつもりである。

本論の具体的な構成は次の通りである。まず歴史哲学や歴史理論の探求と不可分である歴史の科学性に関して、我が国におけるこのテーマに関する代表的な哲学者と歴史家との間で交わされた論争を再訪する。次に古代から近代を経て現代にまで至る実証主義的な歴史研究の営みと歴史哲学ないし法則性の探求の関係について考究する。最後に歴史の研究と学習の意義について、国家や社会のみならず個人のレベルでもどのような効能があるか、本稿筆者の授業の経験を交えつつ提言する。なお本稿のタイトルにある「物語り」（英語では“narratology”ないし“storytelling”と訳される⁴⁾）は通常使用される送り仮名なしの名詞的な「物語」とは異なる概念をもつことに読者は注意されたい。前者は動詞であり、「物語る」側の行為者としての主体性が含意されている [野家 2016]。本稿筆者の仮説的結論は、もし歴史家が少しでも明るい未来を招来させたいと願うならば、個別実証主義という安楽な巣ごもり状態を自ら脱する勇気をもって広く社会的に有意な歴史的諸事実を関連付けて物語られねばならない、である。ただし、その際に問題となるのは、一体どのような未来を「好ましい」として大多数の人類が共有し、どうやって実現の協働作業に多くの人々を結集しうるのか、であろう。本稿はこの解き難い問題にも挑戦する⁵⁾。筆者の癖である長い前置きはこの辺りで止め、本論に進む。

1. 「歴史の物語り性」論争再訪

(1) 「言語論的転換」と「歴史的事実」の揺らぎ

冒頭でも触れたが、本稿筆者が担当する共通教育歴史系授業の受講生の観察を通じて、大学の歴史系教員から見て好ましがらざる一般的傾向の一つに、「歴史は解釈でどうしても変わる」式の歴史学習に関する、学生に共通する冷めたポストモダンの初期設定がある。それは、前アメリカ大統領が SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）で拡散した「ボ事実や真実とされるものは疑トってかかれ」の傾向と重なる歴史学習軽視現象であると本稿筆者は憂慮する。そもそも本稿筆者が近年力を入れる「歴史の諸相 2」という歴史認識問題を主題とした全学共通教育科目の受講生数は戦後 70 周年の頃には百名を超えていたが、3 年前には 50 名を切り、今や 20 名前後へと激減している。この少数の熱心な歴史愛好家ないし歴史学習の必要性を自覚する学生においてすら、前述のポストモダンの相対主義に基づく認識が大前提となっていることに驚かされる。本項では前述の如き若年世代の「歴史離れ」現象を加速したポストモダニズムの中でもとりわけ問題とされるべき、従来自明的に受け入れられてきた「歴史的事実」すら「相対化」させ

4) 自然科学における「物語り性」の重要性を主張する山極寿一によれば、「ナラティブ」と「ストーリー」の違いとは、後者には「筋書きがある」のに対して、前者は「自由に語り継いで内容を変えることができるのが特徴」とされる [山極 2022] が、本稿では同義とする。

5) 本稿は以前の論考 [川島 2015b] の続編である。是非旧著も合わせてお読み頂きたい。

てきた「言語論的転回」が歴史研究に及ぼした影響について、このテーマで注目すべき発言を重ねてきた小田中直樹（1963 生）の最新刊の学生向け書籍を素材に考察する [小田中 2022b]。

元々経済学部出身でフランスのアナール派の影響を強く受けた小田中は、歴史学の科学性とそれを支える実証主義的な方法論への拭い難い疑念を感じていたであろうと推察する。その発端は、1970 年代初頭以降に、「言語論的転回」という、主に哲学者を中心として提起された科学としての歴史学の土台そのものに本質的な疑いを投げかける動きの顕在化であった。前世紀初頭に端を発する、従来「真実」と言われてきたものは「言葉」を媒介とした意図的で人工的な構築物であり、本質的な実在ではないとする主張は、全ての既成概念のラディカルな否定傾向を特徴とする世界的な学生運動やそれとシンクロした「造反有理」を掲げて高揚した中国の文化大革命、さらにはベトナム戦争におけるアメリカの敗北と「第三世界」の興隆や、黒人史や女性史などの少数派からの新たな歴史研究のパラダイム転換の要求の高まりとも呼応して、最後には 1989 年のベルリンの壁の崩壊に始まる冷戦終結の波も受け、1980 年代から世紀転換期にかけて世界の思想界の主要潮流となるに至った。その結果として、マルクス主義の主要概念である「階級」を含む、それまで自明視されてきた全ての歴史概念が、解釈でいかようにも変わりうる「言葉」にすぎないとして疑われ、自明とされた「歴史的事実」もその「実在」を疑問視されるに至った。この間に「左」「右」を問わず世界各地で歴史家たちの多くは、哲学者からの問題提起をまともに受け止めるというよりも、前述の少数派諸集団の歴史や旧植民地諸国や敗戦国における「国民史」の再構築といった例に見られる如く、相対主義を利用しつつ「欠如の穴埋め」作業に邁進した。

このような社会的風潮の広がりの中で冒頭に触れた若年層における歴史の軽視や歴史離れが加速されただけでなく、極端な「歴史修正主義」が台頭した。業績主義の横行でランケ流の実証主義重視を歪曲した極度に細分化された歴史研究論文の乱発傾向とも相俟って、歴史観なき年代暗記作業が中心の世界史や日本史といった歴史系科目が高校生に嫌われ、政府の方針とも相俟って今や高校の地歴科目ではそれまで傍流と見なされてきた地理の比重が高まっている。前提的な知識が不十分で言わば歴史論争に無防備なまま大学に入学した学生は、周辺諸国からの留学生が発する歴史認識問題の真剣な提起というグローバル化の厳しい現実に晒されて右往左往する事例が頻発する。より由々しき事象は冒頭でも触れた「ホロコーストはなかった」に類する極端な「歴史修正主義」の横行である [武井 2021]。

なお本項の締めくくりに、本稿筆者が歴史認識問題を主題とする全学共通教育科目「歴史の諸相 2」の冒頭で掲げる「歴史とは何か」に関する授業において強調している注意事項を披露したい。なによりも歴史論文は様々な証拠を基に過去の実在を追究することを目的としているのであり、いかなる解釈であれ、主観はあくまでも排除されねばならない。事実の解釈は本来的に歴史研究書ないし論文の消費者たる読者ないし本講義の場合であれば受講生に委ねられるべきものである。最終レポートの作成においては「考えたこと」を極力排除し、あくまでも「調べて分かった事実」について証拠を明示しつつ書くことを心掛けねばならない。その際にはできるだけ歴史的場面に出くわした当事者の証言等の一次史料に当たることが必要であるが、それぞれの立場性のある当事者たちは本当のことを包み隠さず証言する例は稀であるため、あらゆる立場の当事者の証言に当たらねばならないが、例えば戦場の実相は戦死者だけが分かるのであり、当事者の証言にも自ずと限界がある。集められるだけ集まった一次史料から妥当と思われる真実を推論する場合もある。初回授業冒頭でこう言われ、続いて既述の『否定と肯定』の衝撃的な映像を交えつつ「歴史修正主義」が伴う結末の恐怖を実感した学生の大半には、ともかくも確定された揺るぎなき歴史的事実すら「虚偽」と一

刀両断に切り捨て去る極端な相対主義的傾向への一定程度の歯止めがかかったことが最終レポートで確認できる。

(2) 科学哲学者野家啓一による「歴史の物語り性」提起

既述の如きポストモダン潮流が及ぼした憂慮すべき事態を当の発信元はどう捉えているのだろうか。ここで歴史家から哲学者に目を転じ、歴史家において従来否定的に捉えられがちな「歴史の物語り性」の肯定的な側面に関する考察を試みたいと思う。本項で焦点を当てるのは、筆者が以前に「パラダイム」というやや分かり辛い概念の理解においてお世話になった科学史家で哲学者でもある野家啓一（1949年生）の一連の主張であるが、本項で特に注目するのは彼が担当した集中講義の実況放送的文字起こし書籍である〔野家 2016〕。

まず本稿の読者が抱くかもしれない誤解を予め払拭するために強調すべきことがある。野家は「物語り」を軽視ないしその効果を否定してはいないという点である。前著の冒頭において、フランシス・フクヤマによるヘーゲル流の歴史観を前提にした「歴史の終焉」宣言を受けて野家が主張するのは、従来歴史家が一般に嫌ってきた「物語り性」の復権である。ここで注意すべき点を繰り返せば、名詞としての「物語」ではなく、動詞から派生した「物語り」という用語が使用されていることである。野家によれば「人間は『物語る動物』である。」野家はまた「語る」と「話す」の違いにも着目し、「語り得ぬものへの沈黙」を主張して「言語論的転換」の幕開けを先導したルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインの警句⁶⁾への敬意を表明しながら、「話し手」と「聞き手」が相互に交換可能であるのに対して、「語り手」と「聞き手」の関係は固定的である点に注目する。ここに相互性的な「話し合う」とは異なる、多くの場合に既に当事者がこの世に存在しなくなった時点で残された証拠から「語り」を「聞く」作業に特化した歴史研究の本質的な特徴が見出しうるのである〔野家 2005 : 16, 97-102〕。

講義録風の話し言葉で淡々と「語られる」新著において、野家は「言語論的転換」が象徴するポストモダニズムのインパクトの肯定的側面と共に、過度の相対主義に伴う「歴史修正主義」への注意も語られる。高校生の一般的歴史嫌い傾向を助長した背景に歴史認識問題をめぐる国家間の、あまり愉快とは言い難い政治化した国民レベルにまで浸透した論争がある。その一方、マルクス主義とアメリカ民主主義の双方が各々異なった未来のより良き世界の到来を当然視できた冷戦が終焉するとともに「大きな物語」も終わってしまった一方、日本でも保守派の「新しい歴史教科書」の提起で高校生の政治嫌い傾向と重なって歴史離れは加速された。こうして歴史学は本来の事実の追究と確定という厳密な科学性を支える実証主義から切り離され、「解釈の学問」と見なされるに至っている〔野家 2016 : 23-28, 63〕。

「物語る」ことの重要性に加えて本稿筆者の目を惹く野家の主張は、歴史家が自明と見なす歴史研究の目的とされる客観的な過去の「事実」の追究と解明が必然的にもたらす解釈をめぐる現実の熾烈な論争の指摘である。野家は科学史家の始祖とされるカール・ポパーの「事実そのものは意味を持っていない。事実はいわゆる諸決定を通じてのみ、意味を獲得しうるのである」という言葉を引いて、歴史家の純粋な実証的作業が結果しうる事態への責任性を追及する〔野家 2016 : 86〕。実証作業と解釈の関係で歴史家として身につまされる反省点をもう一つ挙げれば、時代の風潮の変化の影響によって、歴史的に確定された過去の「事実」といえども、後から振り返って付加される

6) 主に「語りえぬものについては、沈黙しなければならない (Wovon man nicht sprechen kann, darüber muß man schweigen)」〔ヴィトゲンシュタイン 2003 : 149〕を指す。

意味がありうるという点である。この意味で歴史家は「語り直し」を常に求められているのであるが、反証可能性が高い学問分野ほど経験的内容が豊富であり、情報量が多い、という野家の言葉は、歴史家が自らの科学性を堅持する上で大いに励みになると本稿筆者には思われる〔野家 2017：83-93〕。

野家の所説で特に論争を呼ぶのは、歴史的知識は観念的再構成であって、経験的観察ではない、という主張である。野家によれば、歴史的な事実とは「知覚」によっては確定できないとされる。野家が指摘するように、歴史家が「物」として知覚する文書資料や発掘資料は、実は物理的な対象物である以上の何か、すなわち「過去の痕跡」として「われわれに語りかけて」くる存在なのである〔野家 2016：97-98〕。本稿筆者は大筋で同意しながらも、知覚的に事実を確定できないという結論部分には違和感を禁じ得ない。なぜなら、とりわけ当事者の多くが存命中である中で百名に上る当事者へのインタビューを交えて1960年代のアメリカの社会運動史研究をまとめた経験〔川島 2008〕から、様々な立場の関係者の言葉を直に聞きながら自分自身も当事者の一員になったような感覚を確かに抱くようになり、その当時の状況がより鮮明に意識されるに至った経験が本稿筆者にはあるからである。それを「観念的である」と一刀両断にされることには同意し難い。このような若干の問題を孕む一方、過去は実在し得ない、語ることで初めて出現する、という指摘には同感を覚える〔野家 2016：106〕。

野家の主張のまとめとして、言わば機能主義的で実証主義的歴史研究における、歴史家にとって最も抵抗感のある、理論物理学と同様の演繹的で理論的な側面の探究の必要性と有効性について触れる。歴史的な叙述の対象は「もの」ではなく「こと」である。すなわち個々の「事物」ではなく、関係の糸で結ばれた「事件」や「出来事」であり、それは「知覚」ではなく「思考」の対象である。ただし、歴史が実在的と見なす過去の「事実」は素粒子の「理論内存在的」と同じく「物語り内存在的」であり、フィクションという誤解さえ防止すれば、歴史を「物語りの存在」と呼ぶことは可能であるとされる〔野家 2016：116-120〕。本稿筆者はこの指摘とE・H・カーによる「歴史とは過去との対話である」という言葉との間に意味の重なりを感じ、大いに同意するものである〔カー 2022：86〕。「物語り」としての歴史を叙述する際の三つの要素として挙げられるのは、まず現在との接続性、次に他者の証言との一致、最後に物的証拠である。この三要素を考慮しつつ、現在に至るまでの通時的整合性と、その各々の過去の時点における共時的整合性という、二本の座標軸を設定することが肝要とされる〔野家 2016：121〕。加えて、通時性に関して本稿筆者が大いに同感を覚えるのは、歴史研究が孕む「解釈学的先取り」が在るべき将来に向けた「未来構想力」を有するという指摘である〔野家 2016：131〕。この点に関しては本稿の後半で詳述する。

(3) 実証主義歴史学者遅塚忠躬からの強烈な反発と野家による弁明

「歴史の物語り性」に敏感に反応した歴史家の一人にフランス近代史家の遅塚忠躬(1932-2010年)がいる。本項においては遅塚の絶筆に基づいて、本稿筆者を含む過半の歴史家を代表していると思われる、「歴史の物語り性」の主張と科学性の否定論に対する歴史家からの一般的反発と見なして要約した後に、野家からの再反論について分析する。

遅塚の所説で第一に注目すべきは、野家の「歴史≒物語り」論の中心にある「歴史の反実在論」へのきっぱりとした拒絶的批判である〔遅塚 2010：194-195〕。本稿筆者だけでなく、歴史家の同業諸氏の多くも、歴史的事実の確定作業という、職人の養成課程に似た師弟関係の下で厳格な実証主義的訓練を長年積んできており、野家が十把一絡げ的に「歴史的事実」に関する「実在」を

一刀両断的に否定する態度には、遅塚と同様に強烈な違和感を覚えるであろうと推察する。「調べる」ことよりも、「考える」ことを本業とする哲学者には、史料の渉猟という膨大な時間とエネルギーを要する基礎的準備作業を前提とした、さらに膨大な時間とエネルギーを要する相互に矛盾を含んでいる史料の丹念な批判作業の大変さは想像し難いであろうと推察する。もちろん哲学者固有の苦闘に関して歴史家の想像力が及び難い点は遅塚のみならず本稿筆者も認めざるを得ないであろう。その上で誤解してはならないのは、遅塚が指摘する如く、歴史学の作業工程は後に詳述する五つの段階から構成され、歴史的な諸事件の背後にあるものを含めた個々の事実の確定を土台とした後半の作業工程で行われる諸事実相互の因果関係や相互連関、諸事実の意義の解釈、さらにはそれらを踏まえた歴史像の構築に関しては、野家による歴史の「物語り」論が含む歴史家への批判に同意できることを遅塚自身も認めている通りであり、本稿筆者もその見解に賛同する〔遅塚 2010 : 196n29, n30〕。

遅塚の死後に出版された、前項で引用した野家の新著の末尾には遅塚に宛てた「歴史物語り論」のための弁明が「補遺」として収録されている。亡き論争相手が代表する歴史家の末端に位置する本稿筆者を含む存命中の専門的歴史家に対して、野家は次のような興味深い「歴史物語り論」の私的な起源を開陳する。

私が主張する「歴史の物語り論（ナラトロジー）」の出発点は、ごく単純なところにあります。つまり、歴史は過ぎ去った過去の出来事の記述である以上、その出来事を直接に知覚することはできず、言葉による「物語り（narrative）」を媒介にせざるをえない、ということです。言葉は実在であると非実在であるとを問わず、それを指示し、語ることができます。ロマンス語系では、「歴史」と「物語」が同根であるいは同一の言語で表現されているという事実は、そのあたりの事情を示していると思われます〔野家 2016 : 163〕。

その上で、野家は歴史認識問題の前提的な了解事項にもつながる重要な指摘を行っている。

歴史とは、何よりも公共的に認知された過去の事実にはかなりません。その点で、過去の存在と過去の「語り」との間には、夢の場合と同様に密接な内的繋がりがあります。さりとて、夢と過去を同一視するわけにもいきません。過去は不在の出来事ではあっても、夢や虚構とは異なり、「かつてあった」という強烈な実在意識が伴っているからです。この実在意識は、実際に自分が体験した想起的過去にとどまらず、体験しようにもできない歴史的過去全体に浸透しています。それを支えているのは、実在との絆を形作っている広義の史料の存在にはかなりません。もし証拠（エヴィデンス）としての史料が消滅してしまえば（たとえば空襲で焼失した明石原人の化石のように）、過去の事実は拠って立つ足場を失い、その身分は夢と選ぶところがなくなることでしょう。それゆえにこそ、歴史家は資料の発見、収集、保存に心血を注ぎ、その解読と分析に学問的生命を賭けるのです〔野家 2016 : 184-185〕。

ただし、客観的であろうとする歴史家の作業に主観が入り込む余地があることにも野家の注意は向けられる。

付け加えておかねばならないのは、歴史的証拠のみならず、歴史家自身がやはり一枚のゆがんだ鏡であるほかない、ということです。まず第一に、歴史家は過去の一部をなす膨大な歴史的証拠の中から、自

分が有意味と認め、価値があるものと判断した史料を選択し、そうでないものを排除せねばなりません。その選択と排除は、すでに一つの解釈です。ついで歴史家は、それらの有意味な資料を整合的に理解し、因果的に関係づける独自のプロットを構想するでしょう。そこには、個々の歴史家固有の視点や史観が否応なく浸透しているはずで、そして最終的に歴史記述を始めるとなれば、歴史家はどのような読者に向かっていかなる言語を用いて、どのような文体で書くのかを決定せねばなりません。そこではいかに公正中立を心がけようとも、歴史家の立ち位置、すなわち彼／彼女の人種、国籍、ジェンダー、宗教的信条、社会的地位などを含む発話のポジションナリティが既述の方向と内容に影を落とすことになるでしょう [野家 2016 : 187-189]。

(4) まとめ——方法論的科学性追究の原則と「時代精神」による影響の不可避性

「言語論的展開」を契機として野家と遅塚の間で闘わされた「歴史の物語り性」に関する論争を踏まえれば、次の諸点を歴史研究の前提として概ね共有しうるのであろう。まず歴史研究の方法はあくまでも科学的であるべきであり、とりわけ過去の出来事の背景的な個々の歴史的事実の確定作業においては物的証拠に基づく可能な限り厳密な実証性が求められるという方法論的な前提の共有である。これはある意味で刑事事件捜査、つまり警察官が容疑者を確定し、起訴するまでの作業に酷似している。その後に関廷される裁判では検事と弁護士がそれぞれの立場からさらなる証拠に基づく有罪や無罪の主張を行い、最終的に判事がある種の教訓を含めた総合的な判定を下す。歴史家もある出来事の実事のみならず、その価値判断を含めた全体像を提示しつつ、後世への教訓を述べることを求められている点で同様である。それは、時に冤罪判決や政治判断が下され、再審裁判で覆される可能性を秘めているのと同様に、将来の批判に広く開かれたものである。とりわけ本稿で何度も取り上げてきた E・H・カーによる「先ず歴史家を研究せよ」[カー 1962 : 27] という言葉⁷⁾ が意味する如く、いくら客観的で中立であろうと努めても、時代の風潮ないしヘーゲル流の言葉を使えば「時代精神」が歴史家に与える影響は無視しえないのである。これらを確認しつつ、次節では歴史理論と実証研究のバランスの考察に進む。

2. 歴史理論と実証主義をめぐる論争史再訪

(1) ヘーゲルからランケへ——歴史哲学から実証主義的研究方法への転換

既に繰り返し言及したように、冷戦終結時にフランシス・フクヤマが主張した「歴史終焉」論が基にしていたのはヘーゲル哲学であった。周知の如く、弁証法を主導するドイツ観念論を代表する哲学者であると同時に主著『歴史哲学講義』において、人類の自由への希求を特徴とする「時代精神」の実現過程が人類史の本質であることの唱導に努めたゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル (1770-1831 年) は、世界史を理性の歩みとして理解し、より具体的には「世界史を自由の発展の過程として描きだすもの」と主張した [長谷川 1994 : 376]。ヘーゲルにこのよ

7) この有名な警句的表現は本文にある「歴史が扱っている事実の研究を始めるに先立って、その歴史家を研究せねばならない」という表現を基に 1962 年出版の旧版編集者が便宜的に付した見出しで、新版にはこの見出しが見当たらない。ただし、1987 年版を基にした新版においても「事実を研究するよりも前に、歴史家を研究する」べしという、読者に向けたカーの旧版見出しの警句は十分生かされていると見なさう。

うな確信を抱かせたのは、宗教革命を契機とした啓蒙思想の興隆とその実現に向けた時代精神であり、その具現化と言うべきフランス革命とその後のナポレオンによる西欧支配という、「近代」という歴史区分の本格的幕開けを彩る一連の世界史的事件であった。「歴史を支配するのは理性であり、歴史のながれは自由の発展過程である」という自信に満ちた確信が当時の西欧知識人に浸透する中で人類史を遡って跡付けることがヘーゲルの歴史哲学の基本的動機であった [長谷川 1994 : 177-178]。

ただし、ヘーゲルの『歴史哲学講義』には、次に引用するように、今日の我々の常識から見て、違和感を拭い切れないほど前近代的な雰囲気に満ちた記述が目立つことも忘れてならないであろう。

この高度な精神（引用者註：キリスト教信仰）は、人間の精神の無限の普遍性を意識させることによって、精神の調和と解放を目指そうとするものです。キリスト教が絶対の対象として掲げる真理は精神（精霊）であって、しかも、人間自身が精神である以上、人間は絶対の対象のなかに身をおき、そのなかに世界の本质とおのれの本质を見出します。が、本質が対象としてむこう側にあるのではなく、精神として自分の身近にあることがあきらかになるためには、神（精霊）が特殊な一人として目の前にあらわれるという、その生身の肉體性が否定されねばならない。肉體という異質なものが破棄される時、精神（精霊）による和解が完成します [ヘーゲル 1994 : 161-162]。

神に近づこうともがき苦しむ人間の精神性を称揚するあまりにその肉體的側面を軽視してしまうという点で前近代的価値観の名残が否めないヘーゲル学派の歴史哲学が主流である歴史学研究的観念的方法論に本質的な異議を唱えたのが、レオポルト・フォン・ランケ（1795-1886年）であった。広範な史料収集と厳密な史料批判に基づく実証主義を信奉する近代歴史学の開祖とされるランケにおいて看過されがちなのは、当初彼がライプチヒ大学の学生時代に専攻したのが歴史学ではなく古代文献学であったという事実である。換言すれば、学生時代に課せられた古文書の訓詁学的で厳密な実証主義的訓練という実践的な経験が後の彼の歴史研究の基本姿勢の形成に大いに影響を及ぼしたという事実である。卒業論文はギリシアの歴史家トゥキディデスに関する文献学的研究であった。「事物が実際どうであったか（Wie es eigentlich gewesen）」という事実の追究を信条としつつ、厳密な史料批判を基に過去を再構成することを説く「近代歴史家批判」の斬新で科学的な態度は当時の学問界で称賛を浴び、彼はヘーゲルがまだ在職中であるベルリン大学に招聘されて以降、往時のヘーゲルを凌ぐ学者としての敬意を集め、歴史哲学に代わって実証主義が西欧歴史研究の主流となったのである [林 1966 : 127-128]。

ただし、ランケにおける当初の具体的な研究対象はもちろん、その実証主義重視の方法論でさえも、彼が生きた時代風潮、つまり時代精神の影響を受けた点で、ヘーゲル主義者と本質的に異なるものではない。ランケの青年期はまさにナポレオン戦争の真ただ中であり、若きランケを魅了したのはナポレオン軍占領下のベルリンで「ドイツ国民に告ぐ」（1807年）という、未統一のドイツ人にナショナリズムを鼓舞したヨハン・ゴットリーブ・フィヒテ（1762-1814年）であった [ランケ : 46]。長寿を全うしたランケではあったが、1830年と1848年に西欧諸国で連鎖的に起こった革命を体験し、晩年に至って彼自身が「世界の運命を一変させた」と言った普墺戦争（1866年）と普仏戦争（1870年）を経験した。それはかつてフィヒテが夢見てランケもそれに同調したドイツ帝国の成立に帰結した。死の前年に口述した『自伝』の末尾では、これらの晩年の出来事が「私の最

後の力を世界史に関する著作に捧げようという気持ちを起こさせた」と吐露し、「私はいまなおそれに従事しつつある」と語られているが〔ランケ 1996：104〕、ついにそれは完成せず、実証主義的なモノグラフ研究の蓄積の集大成として彼が企図していた「世界史」の叙述は未完のままで終わり、現代に生きる我々は彼の歴史観を明示的に知る機会を失ったのである〔ランケ 1941〕。それもあつてか、個別実証主義への埋没という象牙の塔への歴史家の自己隔離傾向が許容される状態が黙認され続けているのである。

(2) マルクス主義から近代世界システム論へ——グローバルな搾取構造枠組の設定へ

観念主義的なヘーゲル学派の影響を受けつつもやがてその過度な精神主義に反発を覚え、独自の学派を形成した別の巨頭はカール・マルクス（1818-83年）である。前著拙稿でも触れたが、本稿筆者にとって忘れ難いのは、次の二点である。すなわち、初期の著作である『ドイツ・イデオロギー』（1845-46年に執筆）において彼自身が「われわれはただ一つの学、歴史の学しか知らない（Wir kennen nur eine einzige Wissenschaft, die Wissenschaft der Geschichte）」と宣言して歴史研究を重視していること、また同書においてマルクス主義の柱をなす唯物史観を「意識が生活を規定するのではなく、生活が意識を規定する（Nicht das Bewußtsein bestimmt das Leben, sondern das Leben bestimmt das Bewußtsein）」という分かり易い言葉で表現していることである。以上二点を学生時代に同書において発見した本稿筆者は、京都大学文学部で学生が3回生に進級する折に選択を強いられる専攻として現代史を選ぶ決意を固めた〔川島 2015b：142n2；マルクス&エンゲルス 2002：24，31〕。個人的ないきさつはともかく、我々「遅れて来た青年」世代は、マルクス主義の何たるかを彼の著作から自分なりに理解する個人的努力を強いる時代精神ないし周囲からの無言の圧力を意識した世代であることに間違いはないであろう。本項で強調したいのは、しかしながら、マルクス主義も時代の影響の産物であり、それゆえに時代の推移とともに修正や補強が必要であるという点において、歴史理論ないし歴史哲学一般の歴史における例外ではないという事実である。

その欠点の第一は、マルクス主義が一国史的な枠組み、ないし英国という先行するモデルを他の後発国が踏襲することを暗黙の前提としていることである。本項目では便宜的に前者を「一国史観」、後者を「単線的発展モデル史観」と名づけることにする。マルクス主義における一国史観に対する最初の補強的な批判の試みはウラジーミル・レーニンの「帝国主義」論によってなされた。マルクスは「世界の労働者の団結」を訴えたが、先進資本主義国は広大な植民地帝国を形成し、一国史観を前提としている限り宗主国の労働者階級が植民地の被抑圧民衆と階級的な連帯を構築し難い理由をうまく説明できないのである。ただし、本稿筆者の見るところでは、二度の帝国主義諸国間の世界戦争を予言したレーニンの慧眼は認めるとしても、依然として単線的発展モデルが前提とされていたことは否定し難いであろう。植民地は独立を果たし、資本主義の下で工業化を達成し、やがて社会主義革命が起こる、とされた。しかしながら、最も資本主義が発達する英米をはじめとする西欧諸国や日本では遂に社会主義革命は起こらず、むしろロシアや中国などの後発国で言えば開発独裁的変種としてしかそれは起こらなかったのである。さらに、ソ連が解体された後、「改革開放」という国家レベルの資本主義で経済発展を達成した中国が社会主義であるかどうかを判断するのは誠に悩ましい。ともかく、マルクスが提唱しレーニンも夢見た「万国の労働者の団結」は、第一次世界大戦勃発以降今日に至るまで、実現の兆しは見えないままである。

本稿筆者が見る限り、マルクス主義に内在した一国史観や単一発展モデル史観の欠点を本格的に修正補完したのは、イマニエル・ウォーラステイン（1930-2019年）が提唱し始めた「近代資

本主義世界システム論」(以下では「世界システム論」と略記)である。非常に難解でウォーラー・ステイン自身も簡潔な説明が未完のままでこの世を去った世界システム論を高校生にも分かり易く説明したのは川北稔である[川北 1996; 川北 2016]。なぜ英国の労働者階級とインドやジャマイカの植民地民衆は反帝国主義に向けた効果的な国際的連帯を形成し難いのか。その答えは、英国の労働者が帝国主義的国際搾取システムのお零れに与っているからに他ならず、それを象徴するのが少額の料金でカフェにおいてモーニング・コーヒーやアフタヌーン・ティーを簡単に楽しみつつ帝国主義本国の優位性を実感できる当時の大衆文化的な流行の背景的解明によってもたらされるのであった。そのような中核的国家の労働者は国際的な視点に立てばグローバルな搾取体制における恩恵に与れる構造の末端に所属しているのである。しかも日本という例外を除けば、そのような中核的諸国の人々の肌の色は「白」であり、世界システムで搾取される植民地の民衆は「有色人」である。そのように考えれば、肌の色に基づいて構築された「人種」による人間集団の差別の近代起源説も頷ける。管見によれば、上記の如く日本が中心的な中核諸国において例外なのは、欧米によるアジアでの植民地支配を地理的条件で免れ、黒船で来襲したアメリカが南北戦争という未曾有の内戦の混乱期にあるうちにいち早く明治維新を達成できたという、主として偶然と幸運の重なりに他ならない。ただし、文明開化や脱亜入欧、そして富国強兵の諸政策の過程で、周辺諸国の植民地支配を試みた結果、最終的には敗戦を喫し、今日に至ってしまうのである。

グローバルな搾取構造の指摘と並ぶ世界システム論における二大特徴のもう一つは、中核地域の中心を成すヘゲモニー国家の推移ないし交代に伴って起こる世界規模の戦争の不可避性である。「新世界」と呼ばれた南北アメリカへの西欧の進出で本格的に始まる「近代」という世界規模の搾取構造を持つ新たな時代の初期において軍事的な覇権を確立するのはオランダであり、それをフランスと相争って勝利するのが英国である。両世界大戦を契機にアメリカがそれを引き継いだ、ベトナム戦争での敗退をきっかけにヘゲモニーが揺らぐ時代を迎えている[川北 2016: 19]。ロシアによるウクライナ侵攻によって、今まさに人類は第三次世界大戦という人類絶滅の危機に直結する未曾有の脅威に直面している。丁度ベトナムの最終的勝利を画したサイゴン陥落(1975年4月30日)にリアルタイムで学生として接した本稿筆者およびその世代は、当時「アメリカ帝国主義」と非難されたアメリカの覇権が後退する時代の幕開けを肯定的に受け止めた一方、まさかそれが現在のそのような人類史的危機の深刻化を招くことになるとは夢想さえできなかった。そのことを、今ウォーラー・ステインの警句を復習しながら本稿筆者は恥じ入るばかりである。

(3) 家族類型ないし文化による初期設定の持続的影響

なぜ共産主義体制はマルクスが予想したような資本主義先進国ではなく、後発的なロシアや中国で実現したのか、また遠く離れたドイツと日本の社会制度が似ているのはなぜか、さらにアメリカ人が自由と独立を重視する理由は何か。このようなマルクス主義の守備範囲を超える問いに取り組んだのがエマニュエル・トッド(1951年生)であり、その回答は、全部で八つ、大きくは四つに分類される家族類型論にある[トッド 2016; 鹿島 2017]。すなわち、①アングロサクソン系を主とする自由主義的で競争的な資本主義に親和的な絶対核家族、②フランスやスペインなどを主とする兄弟は平等に相続されるが女性に差別的傾向を孕む平等主義的核家族、③ドイツや日本を主とする親の権威が強く残るが女性の権威が強い直系家族、④ロシアや中国を主とする大家族制の外婚制共同体家族、以上の四類型である[鹿島 2017: 26-28]。経済決定論のマルクス主義と異なって文化的な初期設定の持続的影響力を重視するトッドではあるが、この全ての類型に共通の歴史的画期点

をもたらす一つの要因を挙げている点で注目される。それは識字率であるが、とりわけ女性における識字率が50%を超えると出生率が低下し、社会的な安定が得られるとされる。それゆえに、サミュエル・ハンチントンが警告するように文明は衝突するのではなく、むしろ接近しつつあるとされた。トッドの所説は「アラブの春」の到来で、少なくとも短期的には立証されたかに見えた [ハンチントン 1998; トッド&クルパージュ 2008]。

歴史理論からはやや離れるが、本稿筆者が専門とするアメリカ社会史との関連で言及したいことがある。トッドは移民への同化主義的な圧力が強いフランス生まれでありながら、多文化主義を掲げるイギリスで高等教育を受けた。そのような両政策の実態をよく知るトッドの目からすれば、多文化主義は移民の困窮状態に対する放置の論理を孕んでおり、結果的に隔離をもたらす言い訳にすぎない、と否定される [トッド 1999]。このような多文化主義への真摯な批判には、ほぼ無条件でそれを肯定的に受け入れるリベラル派の同業諸氏に対して、いくら耳が痛くとも是非とも一読に値すると本稿筆者は主張するものである。

文化的な初期設定の決定的な影響力に関する理論と事例に関しては、本稿筆者がかかわるアメリカ史分野で二つの注目すべき研究がある。その一つ目は、元来アングロサクソン系の初期文化が多様な移民が持ち込む諸文化と混じり合って単一のアメリカ文化が融合されたとする「メルティング・ポット論」ないし多様な要素の調和的残存を重視する「サラダ・ボール論」という二大理論に対する反論がなされつつあるということである。例えばアメリカには植民地時代の当初から現在まで400年間にわたって11の異なった相容れない「国民」に匹敵しうような多様な文化的背景を持った住民集団が祖先の地から持ち込んだ独自文化を堅持しながら今日まで領域的な衝突を繰り返して来たとするユニークな本が出され、昨今のアメリカの社会的分断の歴史的起源への関心の高まりと共にベストセラーになっている [ウッダード 2017]。それは従来の「人種」に基づく分断の分析や世代間衝突論とは違った角度からの、ある意味で文化的な初期設定は社会や国家や企業ないしより小規模な集団においても決定的に重要であり、それは後からの修正が非常に困難であり、また好ましい多文化の共生的な状況を創出することが如何に困難であるかも示している。

もう一つは「人種」にかかわる分断の起源と解消が困難である背景的説明に関する研究書である。南部諸州、とりわけかつて奴隷制が産業の中心であった「ブラックベルト」と言われる地帯で未だに差別的な政治家の台頭が目立つ主要な理由を、前述の如き文化的な初期設定の決定的な影響に求めた政治学者による歴史的な実証研究である [Acharya, et al. 2020]。同書冒頭の謝辞においてこの3名の研究者による共同研究の動機が次のように説明される。

なぜ南部は頑ななまでに保守的なのか。なぜ南部白人はとりわけ人種や再分配に関する論点においてこれほどまでに保守的であり続けるのか。このことによって合衆国は他の西洋民主主義国と比べてより保守的になっているのではないか。我々共著者はこの問題について討論を重ねながら、歴史的諸力に立ち戻り続けてきた。そして、多くの政治経済学分野の諸論文を渉猟しながら、今日の南部政治と南部の奴隷制という過去との関係を探求し始め、政治的な態度に関する歴史的な持続性についてデータを集積するとともに議論を展開してきた [Acharya, et al. 2020: xi]。

前述のような初期設定文化の長期的な持続性は専門的には「経路依存 (path dependency)」と言われる。数値データに基づいて下された同書の結論は、奴隷制の廃止やキング牧師ら黒人民衆が生命を賭して糾弾し、心ある過半の白人も応援して成立した強力な連邦法によっても、差別的な初期

設定は南部の文化的基層に埋め込まれたままであるという、かなり悲観的なものである。南北戦争などの軍事力行使を含む外部からの矯正の圧力でさえもせいぜい一定期間しか効果を発しないのである [Acharya, et al. 2020: 212-214]。

(4) 『資本論』の新たな読み直しとアルゴリズムを駆使した新たな民主主義の提案の可能性

歴史理論を扱う本節の最後に、我が国の経済学分野を代表するグローバルに活躍する二人の若手経済学者の提起に耳を傾けたい。

まず東京大学に合格しながら奨学金を得てアメリカの大学を卒業後にベルリンのフンボルト大学で経済学の博士号を得て東大の准教授となった経済学者の斎藤幸平（1987年生）である。マルクス主義経済学を専攻し、2018年に国際的にマルクス主義研究の最高の賞と認知されるドイッチャー記念賞に輝いた斎藤がマルクスの大著『資本論』の現在からの読み直しによって提起するのは、世界規模の経済的な格差の深刻化や気候変動、さらにはコロナ禍といったグローバルで人類史的な危機への本質的な対応を欠き、国家毎に分断化されたままの現状への強烈なダメ出しである。注目すべきは、国連が提唱するSDGs（持続的成長目標）に対しても批判の目を向けていることである。彼は「はじめに」でSDGsを「大衆のアヘン」（引用者註：マルクスによる「宗教は民衆のアヘン」という言葉のもじり）であるとして一蹴する。彼によれば「SDGsはアライバイ作りのようなもの」にすぎない。二酸化炭素などによる温暖化のスピードは生産至上主義と重なるSDGs程度で対応できる程度や時をとくに過ぎており、より厳しい規制を必要としているからである [斎藤 2020: 3-7]。地球環境問題と並行して、斎藤の目はグローバルな格差是正や「経済成長」前提論への根本的な批判に向かう。彼はかつて宇沢弘文が提起した「社会的共通資本」論をより住民本位の目線で捉えた「〈コモン〉という第三の道」を提唱する [宇沢 2000; 斎藤 2020: 141-142]。総じて斎藤は資本主義には改良の余地を極めて限定的にしか見出さない。なぜなら「脱成長の資本主義」などありえないからである [斎藤 2020: 131-133]。ただし、斎藤は、どのようにして彼が考える社会主義を実現するかについて具体的に語っていない。ともかくも、NHKの特集番組で世界的な著名学者と英語やドイツ語で互角に渡り合う斎藤の語学力と知性は同じ日本人として驚異的かつ誇らしい限りである。

二人目は東京大学を卒業後、MIT（マサチューセッツ工科大学）から経済学で博士号を取得し、イエール大学で教鞭をとりながら日本の大学でも教える成田悠輔（1985年生）である。成田の提案で目を惹くのは政治家をAI（人工知能）に代えるという主張であり、AIを機能させるアルゴリズムの作成および修正過程をオープンにし、より多様な困難を抱える個人々の隠れた要求を効率的かつ包括的に掘り取り、きめ細かくかつ大胆に問題解決に当たらせるというものである。なるほど、成田が主張するように、日本人の各個人々が直面する困難は非常に多様であり、そのうちの一つへの対応が他の問題の深刻化に繋がったり、新たな問題を生じさせたりしかねない。その解決が生身の政治家や官僚の能力をはるかに超えているのは事実であろう。まさに適切なアルゴリズムに導かれたAIの方がうまく対処できるであろうことは容易に想像がつく。問題は、成田本人も指摘するように、どのようなアルゴリズムを作成し、しかもその日常的な修正業務をどのように管理するか、である。成田が基本条件とするのはその両過程における透明性の確保であり、それも含めて成田は新たな「民主主義」と呼びたいようである。成田は資本主義に希望を失っていない点で斎藤と基本的立場を異にするが、斎藤と同じく、彼の提案を実現する道筋は具体的に明示されていない [成田 2022]。ともかくも、本稿筆者はテレビ番組やYouTubeで頻繁に出演して断片的に語られる成田の

所説の全体像を知るために彼の近著を読み、彼の「選挙なしの民主主義」という壮大な提案に心から魅了されるとともに、多くの日本人が政治家への不信感を募らせつつある現状に鑑みて、SNSを駆使すればひょっとしてかなりの実現可能性を持っているのではないかという印象を得た。

この立場を異にする二人の対談がYouTubeで閲覧可能であり、その主要部分は無料で視聴が可能であることは大変に喜ばしく有難い限りである〔成田&斎藤 2023〕。何よりもこの対談映像を視聴することによって元気づけられる点は、この俊英たちが立場を異にしながらも目標を共有している事実である。相互に敬意溢れる討論の様子に、悲惨な「内ゲバ」を直接体験した本稿筆者の世代が苛まれた「時代精神」が大きく変化したことを実感せずにはおられない。問題は二人が共有するゴールをどのように実現するかという方法論である。

歴史研究における理論と実証の両面性の検討を課題とした本節をまとめれば、歴史哲学や社会科学者による歴史理論研究の歴史が示している特徴を一言で表せば「未来への眼差し」の強さということになるであろう。他方、歴史哲学への強烈な嫌気と古典文献研究の厳格な訓練を背景に持つランケに始まる実証主義を第一に掲げる歴史研究の主流における主たる関心はあくまでも「過去の事実」の追究に向かう。ただし、ランケの最晩年の言葉が暗示するように、「実証第一主義」の近代歴史学の開祖においても、世界史、すなわち過去から現在を経て未来に連なる「人新生」の大きな流れを見通す歴史の全体像の提示を生涯の目標としていた如く、細分化された個別実証作業それ自身が歴史家の最終目標たり得ないのは当然である。最後となる次節では再び歴史研究における科学性と「物語り」の要素をめぐる当初議論に立ち返り、本節で概観した歴史理論の研究史を踏まえつつ、実証主義を旨とし続ける歴史研究に携わる者が歴史観の提示と重なる「物語り」を構築する上で果たしうる未来を含めた人間社会の公私両面にわたる貢献の可能性を探る。

3. 歴史研究に求められる社会貢献とは何か

(1) 記憶・記録・歴史の区別と主観性の不可避性の再確認

本稿筆者が南山大学全学共通教育科目「歴史の諸相2」の初回授業の冒頭で取り上げるトピックに、記憶・記録・歴史という用語の概念的な定義の区別に関する再確認作業がある。記憶とはある出来事や事件の体験者の心に直接刻印され、事後に折々想起されるものであるが、極めて主観的で、主に口述による次世代への伝承性においても不確実かつ内容的な曖昧さが否めず、多くは体験者の死亡とともにその効力は消滅する。それに対して文章や画像等で残された記録は出来事や事件の実情を知る上で確度が高いものである一方、例えば戦争の場合のように、多くは勝者の立場からの記録のみが後世に残される傾向があり、また古い時代には記録を書き残せる人の数や階層は限定されるために、偏りが否めない。歴史とは、主に記録として残された物的な証拠や存命中の関係者へのインタビューも含む史料を相互に批判的に吟味して過去の歴史的諸事実を確定し、諸事実の関連性を考察し、その意義を追究した結果として生み出されたものである。この作業に当たる歴史家は客観的で中立の立場を心掛け、主観的な解釈を排除し、事実そのものを追究し提示することに集中する。ただし、新聞社の編集委員会でどれを一面トップ記事とするか、どの記事をどれほどの分量で掲載するかを決めねばならず、それが新聞社毎の社風に応じて異なるのと同じく、歴史家にとっても過去の数多^{あまた}の事実から適宜取捨選択し順位付ける作業が不可避であり、その際に歴史家の主観が入り込む余地が生じるのは否めない。問題はその際に歴史家がどのような価値の座標軸に基づいて事

実の取捨選択や順位付けをするかである。以上が本稿筆者による「歴史の諸相2」の初回授業冒頭の注意事項である。

同業諸氏も同様の注意を初回授業の冒頭で受講生に伝達するのが通例であると思われる。一例を挙げれば、第1節で実証主義的歴史学者の代表として引用した遅塚が東京大学の歴史系授業で受講生に提示していた「歴史学の営みの作業工程表」は歴史系講義を生業とする同業諸氏に大変に参考となるであろうと確信する。それは次のような五つの段階を含むとされる。①各自の問題関心に即した問題設定、②設定された問題に即した事実の発見作業のための史料の収集と選定、③選定された史料の批判的検討による考証と背後の事情も含めた事実の認識、④認識された諸事実間の関係性と意味の解釈、⑤当初設定問題への仮説を設定しつつ検証しながら歴史像を構築ないし修正する最終作業、という厳密な実証主義を実践するための五段階である〔遅塚2010:116〕。

上記のように方法論において科学性に基づく実証主義の実践過程を厳密に策定し実行しても、本稿で頻繁に引用するE・H・カーが『歴史とは何か』で繰り返し強調するように、歴史家は時代の影響を排除し難く、また抽象画家においても画幅に収まるように個別テーマを選んで描くしかないように、ハラリのような天才的頭脳の持ち主でも人類の歴史総体を叙述するためには諸事実の取捨選択や順位付けを避けて通れず、そこに個々の歴史家の主観が入り込む余地は排除し難い。本稿筆者が教える学生たちは差し当たり授業レポートや卒論において個別テーマを選ばねばならず、テーマの選定という出発点において歴史叙述者たる学生の主観の介入を排除することは不可能である。問題とすべきは、できるだけ主観を排除することであり、少なくとも大方の歴史家の賛同を得られる選択や順位付けを心掛けることである。そのための不可欠な前提は、諸事実の取捨選択や順位付けの基準となる適切な座標軸をどう設定するか、である。次項では本稿筆者がこれまでに影響を受けた多くの先達の内から戦後の我が国を代表的する哲学者と歴史学者の中から一人ずつ、共に若くして戦争を経験した二人の先達を選び、その所説の再検討から一般に広く受け入れ可能と思われる座標軸の策定法を模索する。

(2) 戦後日本の二人の先達の苦闘を再訪して歴史研究の社会貢献の可能性を考える試み

テーマの選定や事実の取捨選択および順位付けに際して歴史家の主観を排除する上でどんな価値観を座標軸にするべきか。本項でまず取り上げるのは哲学者の市井三郎(1927-89年)である。戦後いち早く鶴見俊輔(1922-2015年)らが始めた思想の科学研究会に加わってベトナム反戦運動に参加し、公害が生んだ水俣病の企業と国家の責任を市民運動家として追及した市井は、当時35億を数えるに至った世界人口を構成する個々人の生まれながらの極端な条件の格差について、戦後いち早くロンドン大学で触れた西欧近代哲学の圧倒的優位性に触れる機会を得た稀有な日本人哲学者としての懊悩に絡めて、次のように綴る。

なぜこの自分は、いま悲惨にも命を賭すべきベトナム人、あるいはギニア人(アフリカ最後の植民地原住民)であらねばならぬのか。いや、なぜこの自分は、同じ日本人に生まれながら、よりによって水俣病のギセイ者として苦しまねばならぬのか。それは、ある人間社会が、物質的生産の《効率》を追いすぎた結果、たまたまある地域の住民にふりかかった大厄災なのだ、などと説明されたところで、いったい自分の問いに答えたことになっているのか。その「厄災」のギセイ者として苦しむのが、なぜ君たちでなくてこの自分でなければならなかったのか〔市井1971:206〕。

このような「実存的な不条理」[市井 1971: 207]にかかわる根本的な問いへの回答として、市井がたどり着いた倫理的価値基準の特徴とそれを人類史的な真の進歩の基準に設定する理由について、次のように明らかにされる。

《各人（科学的にホモ・サピエンスと認められる各人）が責任を問われる必要のないことから受ける苦痛を、可能な限り減らさねばならぬ》というわたしの倫理的価値理念は、次の点で近代既成の倫理基準と異なっている。第一に、「すべて人間は平等だ」とか、「人間は手段としてではなく、目的それ自体として扱われねばならぬ」といった既成の倫理基準は、「人間」として遇する集団に限界をもうけることで、容易に空文化してきた。その種の空文化を、経験的合理性の範囲内で阻止しよう、という点にわたしの価値理念の一つの狙いがある [市井 1971: 143]。

さらに引用同書の別の箇所での「一つの私案」としての価値基準について、市井は次のようにより分かり易い表現で言い換えている。

《おのおのの人間（科学的にホモ・サピエンスと認められる各人）は、みずからの責任を問われる必要のないことからさまざまな苦痛——略して“不条理な苦痛”と呼ぶ——を負わされているが、その種の苦痛は減らさねばならない》という理念の提案である [市井 1971: 196]。

以上の市井の提案をまとめれば、人間は人生のスタート時点における条件の平等性を保障されねばならない、ということ、すなわち機会の徹底した平等化の原則であり、それは社会主義的な結果の平等の保障とは本質的に異なる立場である。それは同時に、アメリカの伝統的な革新主義の系譜に連なる哲学者の代表であるジョン・ロールズ（1921-2002年）の「フェアネス公正さとしての正義」の主張にも大いに共振する [ロールズ 2004; 仲正 2013]。

繰り返しになるが、可能な限り自らの主観や時の政治的風潮の影響を排す上で、歴史家は、人類に普遍的であると多くの人々が確信しうる価値観の座標軸を設定しなければならない。その参考になると本稿筆者が考える先達の二人目は、我が国を代表するローマ史家である弓削達（1924-2006年）である。実証主義史家である弓削が統合的な「世界史」の提示の必要性を訴える背景には、恩師で戦後に一橋大学と名称を変える東京商科大学の学長を務めた上原専禄（1899-1975年）の影響が色濃く感じられる [弓削 1986: 19-23]。個別実証研究の積み重ねにおいても常に世界史的な統合性を意識する弓削は「史料とは何か」を論じている。その中で実証的に過去の事実を確定する上で必須の史料の収集と分析の作業を遂行するに当たって、史料というものが次の三つに分類している点で大いに参考になる。すなわち、「偶然的に残っているもの、意図的に残されたもの、わざと歪曲され偽作されたもの」である。そのような違いを踏まえた上で、種々の史料を駆使して歴史として過去の諸事実を再構成する歴史家の役割が、次のように要約される。

知的生産の一つとしての歴史学は、これらの史料を素材として、人間の歴史を想像する作業である。ということは、この素材に対して、その時その時の現代における、社会的有用性の観点に立って加工し、単なる素材ではない製品を作ることを意味するのである。この単なる素材ではない製品、素材に加工して知的に生産された歴史を、「存在としての歴史」と区別して「ロゴスとしての歴史」とよぼう [弓削 1986: 28]。

上記の引用で座標軸設定のための価値基準の策定に集中する本項において最も示唆に富むのは弓削が言うところの「有用性」の具体的内容である。その点について弓削は社会史家として名高い阿部謹也の言葉を引きながら「歴史学における有用性とは、『人間の尊厳を確かめようとする』」ものと指摘し、次のように付言する。

このこと（引用者註：「人間の尊厳の確立」を指す）に関して、歴史叙述は「生命と生活の危険にさらされている人々」から一步一步教えられ、「人間の尊厳を確かめる」ために史料を見直し、新しく解釈を加えて問題提起をしなければならない。そういうことを我々は阿部氏の文章から教えられると思う[弓削 1986：34]。

では弓削が座標軸として提唱する「社会的有用性」の具体的な内容や判断の基準とは何だろうか。本稿筆者を含む彼の書籍の愛読者にとって残念なことに、それらは明示されない。それが「人間の尊厳の確立」と密接にかかわるとしても、その具体的な価値判断は個々の歴史家に委ねられているのである。ただし、弓削はこの点に関して「社会的有用性の意識は単なる価値の領域ではない。現代認識と結びつき、明日に向かって歴史を生きようとする者にとっての実践的な有用性である」として、「歴史認識の出発点は現在である」と強調している[弓削 1986：71]。

(3) 「歴史は繰り返す」ないし「人間は何度も同じ過ちを繰り返す」という法則性

歴史を学ぶ効用とは何だろうか。このような一見下世話に見えるトピックに学問的に真摯に答えている歴史家にフランソワ・アルトグ（1946年生）がいる。冒頭で引用した新聞記事の中で、小田中はアルトグの所説に基づいて歴史を学ぶ三つの意義について次のように簡略にまとめる。すなわち、①過去に教訓を求める「教訓的歴史」、②あるべき未来を設定しそこに至るプロセスとして歴史を描く「未来主義」、③現在を生きる個人のアクチュアルな問題関心に沿って史実を追う「現在主義」であるが、現在のビッグヒストリー人気が象徴する歴史ブームではこの「三者が混在しつつ展開している」とされる[小田中 2022a；アルトグ 2008]。

これまでの諸議論を踏まえれば、人が歴史的な知見を必要とするのは現在とのかかわりにおいてであり、その意味で現在主義という説明が一番納得できそうである、というのが本稿筆者の見立てである。過去から教訓を得る場合にも先達の失敗や成功を現在に生かそうという意図がある一方、現在は未来に直結している。時間は途切れなく過去から現在を経て未来へと流れ続けているのである。このことを現下の最大の関心事に重ねれば、次のような問いを設定しうる。ロシアによるウクライナへの突然の軍事侵攻と住民虐殺を含む明らかな戦争犯罪に国際社会が為す術もない無力感に捕らわれている今、我々はどのような知見を過去の人間の営みから得ることができるだろうか。当初「世界戦争（The World War）」と呼ばれた1914年に欧州に端を発した出来事が「第一次世界大戦」と呼称されるようになるのは第二次世界大戦の勃発以降だった。その第二次世界大戦ではヒトラーにおいてすら1939年9月1日のスターリンと結託したポーランド侵攻開始時に二度目の世界戦争になるとは予想していなかった。「中立」を決め込むアメリカが真珠湾攻撃を機に参戦し、それが文字通りの第二次世界大戦になるまでに2年3カ月と1週間が必要だった。

マルクスがナポレオン三世のクーデターに居合わせて「茶番」の如き「歴史の繰り返し」を嘆いたように、人はよほどひどい目に遭わない限り反省しない存在で悲劇を繰り返すというのが真実かもしれない[マルクス 2008]。だが20世紀における二度目の人類史的惨劇は「茶番」では済まなかつ

た。民間人を含めて前例の5倍もの犠牲者をもたらした。もし「人は懲りない動物」だとすれば、とことん懲りるためには三度目の世界戦争を経験するしかないのだろうか。それは確実に人類を絶滅的な危機に追い込むであろう。歴史家はそれを阻止できないのであろうか。この問いへの本稿筆者の答えは正直なところかなり悲観的である。だが、希望の余地が皆無ではないと信じたい。本節の最後となる次項において本稿筆者の極めて個人的な体験に触れつつ、「歴史の諸相2」の受講生と本稿筆者との触れ合いの中で垣間見えた歴史の研究と学習がもたらす個人への関与の変化という効能について触れることにしたい。

(4) 未来から見て常に「過去」となりゆく現在を主体的に生きるために

過去の細かな事実確定という丹念な実証作業を基礎とする歴史研究を長年続け、その時々様々な当事者の相互に異なる立場にその都度我が身を置くことで彼ら彼女らが残した史料の渉猟や真偽を見極める作業を続けていると、閃きの分かることがある。それは歴史的真実なるものが確かに存在するという説明不能の確信的直観である。言葉の定義にもよるが、本稿筆者にはその実在が確かに知覚できるのである。それを理解し叙述することが可能であるなら、それができるのはタイムマシンではなく歴史家であるという確信である。本稿筆者は戦後50周年の年にフルブライト若手研究員として家族とともにボストンに1年間滞在研究の機会を得て、さらに世紀転換期には5年間の科学研究費補助金支給を得て、毎夏休みに全米各地の歴史的な現場を訪れ、一連の地域闘争としてのアメリカの市民権運動の当事者や関係者百人余りへのインタビューを敢行し、それらを一冊の大部の書籍にまとめた経験がある[川島2008]。立場を異にする多くの当事者や関係者へのインタビューの結果得られたのは、当初の期待と異なり、新たな歴史的事実の発見というよりも、数多出版される文献における真偽や重要度の見分け力というべき歴史家としての直感力の鋭敏化であった。様々な立場からの意図のないし無意識的な虚偽や忘却や誇張を含むインタビューを比較検討し、文献史料とも突き合わせるうちに、あたかもタイムスリップしたかのように次第に真実めいた場面が眼前に浮かび上がる感覚が得られるようになった。

このような説明し難い神がかり的な体験は他の歴史家からもかつて耳にしたことがある。それは今まで耳を傾けられることもなかった多くの当事者たちの魂の叫びが聞こえてくる思いとでも言うしかない現象である。そのような真実と言うに値する歴史的な出来事や事件の全体像は個々の当事者ではなく、歴史家だけに見えるのである。このような確信の直後に歴史家はこれを皆で共有できるように文書化しなければならないという強い義務感に包まれるのである。この感覚は、おそらく歴史的な出来事を映像化する仕事に携わる映画監督やドキュメンタリー映像作家にも共有されるであろうと思われる。それはE・H・カーが指摘する「過去と現在の対話」に類する歴史家の極めて個人的な感覚でありながら、文章化ないし映像化せずにはいられないという意識高揚を歴史家にもたらす点で社会的な意味を持つ感覚でもあり、知り得た歴史的真実を世間に知らせるといふ、過去の出来事や事件で苦闘を強いられた数多の当事者から託された本来的な責務を歴史家が思い知らされる瞬間でもある。当事者へのインタビューを重ねながら、いつしか本稿筆者は、歴史に埋もれたままの人々の真実の叫びのメッセンジャーとなっていったのである。

「歴史の諸相2」の初回授業でいつも受講生に言うことがある。「今この瞬間」は未来から見れば「過去」である。例えば10年後に身を置けば「今」は10年前である。しかしながら、本当の過去と異なって、「今」は変えうる可能性に富む「過去」である。自らの意志でかなり未来は変えられるのである。歴史の勉強はそのような常に「過去」になり続ける現在への主体的な関与の^{コミットメント}気持ちを起こさせるの

である、といった具合である⁸⁾。毎年の最終レポートの第一問の「歴史とは何か。歴史学習の効用とは何か」への回答を見る限り、上述の本稿筆者の独自の現在主義的な説明の効果はかなりあると自負している。このような未来へ身を置いて常に「過去」となる一方で可変的でもある現在に主体的に関与する努力の積み重ねによる、よりよき未来社会像への想像力の育成とその実現に向けた結集によってしか、人類絶滅の核戦争や環境破壊の本質的な阻止は望めないのではないだろうか。

結びに代えて——広範な実証努力と物語る勇氣と工夫

以上本論の議論をまとめれば、ランケを開祖とする近代実証主義歴史研究の方法論と「言語論的転換」の挑戦を受けて以降の「物語り性」という哲学者からの提起とそれをめぐる論争は、相互に矛盾する、ないし歴史研究の従来パラダイム転換を迫る本質的な論争というよりも、むしろ相互補完的な要素の取入れで歴史研究を補強する契機として理解されるべきである、と結論づけられるであろう。その意味で、確かにランケを起点とする近代の実証主義的歴史研究手法には基本的に揺らぎはない。ただし、E・H・カーをはじめとする諸先達が認める通り、時代の風潮は歴史家に影響を与え、諸事実の取捨選択と順位付けに歴史家個人の主観が不可避的に反映される。その際に不可欠となる価値観の座標軸の設定を避けながら個別実証主義的な殻に籠る傾向が従来歴史家にあることは否めない。ハラリに代表される昨今のビッグヒストリーの隆盛と世界的出版市場での商業的成功は、個別実証主義に埋没し、過度に細分化された「専門性」に籠りがちな歴史研究者に見られる好ましからざる世界共通の傾向に対する、消費者たる一般市民からの「ダメ出し」に他ならない。多くの市民が歴史書に求めるのは今後の人類社会の行く末を見通しうる歴史家による歴史観の提示なのである。この極度に専門分化した個別実証主義に埋没しがちな歴史研究の現状を取り巻くグローバルな批判的世論の高まりという「時代精神」を歴史家は真面目に受け止めねばならない。若い世代の歴史家は、ビッグヒストリーは無理でも、せめて自分が専門とする領域の歴史の長期的視点に立った、すなわち歴史家の歴史観が問われるような通史に挑戦することを近未来の目標に掲げるべきである。実証主義を金科玉条の言い訳としがちな同業諸氏は、90歳を超えた最晩年のランケが「世界史」の叙述に着手しながら完成できなかった無念に想像力を働かせるべきである。

個別実証主義の殻から飛び出すにはかなりの勇氣を必要とする。それは歴史家が一般に忌み嫌う主観的な傾向を免れない「物語り性」を必要としているからである。他方、「物語り性」は実証主義が象徴する客観性と必ずしも矛盾するのではない点に注意すべきである。ただし、前節で触れたように、「物語り性」から独りよがりの主観性を排除するためには大方の歴史家が一致しうる価値基準の座標軸を設定することを心掛けねばならない。それはよりよき未来社会への貢献にかかわっており、「人間の尊厳」という言葉で括れる価値観であるが、その具体性をめぐって、さらにはその実現の方途をめぐって、論争が絶えない。未来志向の他の社会科学諸分野と異なって、過去に向き合う歴史家は、諸事実の仕分けと再構成を通じて「人間の尊厳」の具体的内容と効果的で妥当な実現方法の選択肢を提示するのが仕事であるが、歴史家である限り、徹底的な実証主義を重ねつつも、勇氣をもって「物語り」、すなわち妥当な歴史観を基にした通史的な全体像を語る覚悟を固め

8) 下世話な蛇足だが、酒好きの本稿筆者が毎晩やっているのは、翌朝という近未来に身を置いてそこから見た「過去」としての現在に主体的に関与して飲酒を控えることである。

る必要がある。(了)

参考文献（本文中に引用はないが参照に値するものも含む）

【邦文】

- アインシュタイン, A. S・フロイト 2016『人はなぜ戦争をするのか』講談社。
- アルトグ, フランソワ 2008『「歴史」の体制——現在主義と時間経験』藤原書店。
- 市井三郎 1971『歴史の進歩とはなにか』岩波書店。
- ヴォイトゲンシュタイン 2003『論理哲学論考』岩波書店。
- ウォーラーズテイン, イマニュエル 1997『近代世界システム 1730～1840s——大西洋革命の時代』名古屋大学出版会。
- 宇沢弘文 2000『社会的共通資本』岩波書店。
- ウッダード, コリン 2017『11の国のアメリカ史——分断と相克の400年（上・下2巻）』岩波書店。
- 大木毅 2019『独ソ戦——絶滅戦争の惨禍』岩波書店。
- 小田中直樹 2022a『なぜ歴史なのか』、『朝日新聞』（2022年11月12日）。
- _____ 2022b『歴史学のトリセツ——歴史の見方が変わるとき』筑摩書房。
- _____ 2004『歴史学ってなんだ?』PHP研究所。
- カー, E・H 2022（近藤和彦訳）『歴史とは何か（新版）』岩波書店。
- _____ 1962（清水幾太郎訳）『歴史とは何か』岩波書店。
- 鹿島茂 2017『エマニュエル・トッドで読み解く世界史の深層』KKベストセラーズ。
- 川北稔 2016『世界システム論講義——ヨーロッパと近代世界』摩書房。
- _____ 1996『砂糖の世界史』岩波書店。
- 川島正樹編著 2015『記憶の共有をめざして——戦後70周年を迎えて』行路社。
- 川島正樹 2015a『「米兵は鬼畜ではなかった」のか——沖縄戦をめぐる記憶の共有をめざして』、『史苑』第76巻第1号, pp 112-133。
- _____ 2015b『日本人研究者は欧米地域研究分野でどのような貢献をなしうるか?——ひとりの日本人米国社会運動史家による自らの仕事の意義を自問するささやかな試み』、『南山大学大学院国際地域文化研究』, 第10号, pp. 141-150。
- _____ 2014『アフターマティヴ・アクションの行方——過去と未来に向き合うアメリカ』名古屋大学出版会。
- _____ 2008『アメリカ 市民権運動の歴史——連鎖する地域闘争と合衆国社会』名古屋大学出版会。
- 小泉悠 2022『ウクライナ戦争』筑摩書房。
- 斎藤幸平 2020『人新世の「資本論」』集英社。
- _____ 2021『カール・マルクス 資本論（NHK100分de名著）』NHK出版。
- ジャクソン, ミック監督 2018『否定と肯定（DVD版）』株式会社ツイン。
- 武井彩佳 2021『歴史修正主義——ヒトラー賛美, ホロコースト否定論者から法規制まで』中央公論社。
- 塚塚忠躬 2010『史学概論』東京大学出版会。
- トクヴィル, アレクシス・ド 2005-2008『アメリカのデモクラシー（第一巻上・下, 第二巻上・下, 全4冊）』岩波書店。
- トッド, エマニュエル 2022『我々はどこから来て, 今どこにいるのか?（上）——アングロサクソンがなぜ覇権を握ったか』文芸春秋。
- _____ 2022『我々はどこから来て, 今どこにいるのか?（下）——民主主義の野蛮な起源』文芸春秋。
- _____ 2016『家族システムの起源（上・下2巻）』藤原書店。
- _____ 1999『移民の運命——同化か隔離か』藤原書店。
- トッド, エマニュエル, ユセフ・クルパージュ 2008『文明の接近——「イスラーム vs 西洋」の虚構』藤原書店。
- 仲正昌樹 2013『いまこそロールズに学べ』春秋社。
- 中村逸郎 2023『プーチンの思考から予想するウクライナ侵攻の行方』, 時事ドットコムニュース（2023年1月16日）,

<https://www.jiji.com/jc/v8?id=202301putinpspct>.

- 成田悠輔 2022 『22世紀の民主主義——選挙はアルゴリズムになり、政治家はネコになる』SBクリエイティブ。
- 成田悠輔, 斎藤幸平 2023 『「希望はマルクスか、アルゴリズムか？」成田悠輔×斎藤幸平 初交錯の二人が〈22世紀の資本主義〉を語る』文芸春秋電子版 (2023年1月13日), https://www.youtube.com/watch?v=A_PKUeGgIIM。
- 野家啓一 2016 『歴史を哲学する——七日間の集中講義』岩波書店。
- _____ 2008 『パラダイムとは何か——クーンの科学史革命』講談社。
- _____ 2005 『物語の哲学』岩波書店。
- 長谷川宏 1994 「解説」, ヘーゲル『歴史哲学講義 (下)』岩波書店, pp. 375-381。
- 林健太郎編 1980 『ランケ (世界の名著 47)』中央公論社。
- 林健太郎 1996 「解説」, ランケ『ランケ自伝』岩波書店, pp. 125-132。
- ハラリ, ユヴァル・ノア 2020 「新型コロナ ここが政治の分かれ道 (インタビュー)」『朝日新聞』(2020年4月15日)。
- _____ 2019 『ホモ・デウス (上・下 2巻)』河出書房新社。
- _____ 2017 『サビエンス全史 (上・下 2巻)』河出書房新社。
- ハンチントン, サミュエル 1998 『文明の衝突』集英社。
- 東浩紀, 小泉悠 2023 「“後発の近代国家” ロシアは絶対悪なのか？」小泉悠と東浩紀が〈民主主義〉と〈自由主義〉のジレンマを解く』文芸春秋電子版 (2023年2月4日), <https://www.youtube.com/watch?v=UZyyQhRzpJQ>。
- 「ビッグストーリーの概要と学び方」https://www.akashi.co.jp/files/books/4421/4421_sample_p001-009.pdf。
- フクヤマ, フランシス 1992 『歴史の終わり (上・中・下 3巻)』三笠書房。
- ヘーゲル 1994 『歴史哲学講義 (上・下 2巻)』岩波書店。
- マルクス, カール 2008 『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18日』平凡社。
- マルクス, カール, フリードリヒ・エンゲルス 2002 『ドイツ・イデオロギー』岩波書店。
- 水谷良夫 1991 『「資本主義的世界システム」と「帝国主義」の再定義』、『金沢大学経済学部論集』第11巻, 2号, pp. 127-139。
- 宮台真司 2017 『私たちはどこから来て、どこへ行くのか (幻冬舎文庫版)』幻冬舎。
- 弓削達 1986 『歴史学入門』東京大学出版会。
- 山極寿一 「新たなナラティブ『未来可能性』」, 『朝日新聞』(2022年12月16日)。
- ランケ 1996 『ランケ自伝』岩波書店。
- _____ 1941 『世界史概観——近世史の諸時代』岩波書店。
- リップシュタット, デボラ・E 2017 『否定と肯定——ホロコーストの真実をめぐる闘い』ハーパーコリンズ・ジャパン。
- ロールズ, ジョン 2004 『公正としての正義 再説』岩波書店。

【英文】

- Acharya, Avid, et al., 2020 *Deep Roots: How Slavery Still Shapes Southern Politics*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Fukuyama, Francis, 2017 *America: The Failed State*. Prospect, January 2017. In <https://www.prospectmagazine.co.uk/magazine/america-the-failed-state-donald-trump>.
- Kawashima, Masai, 2017 *American History, Race and the Struggle for Equality: An Unfinished Journey*. Singapore, Singapore: Palgrave-Macmillan (Springer-Nature).

Can't History be Storytelling?

A Philosophical Approach by a Historian of American Studies

Masaki KAWASHIMA

要 旨

歴史認識をめぐる国内および国際的な「記憶戦争」^{メモリー・ウォーズ}が世界各地で頻発する一方、近年ユヴァル・ノア・ハラリによる『サピエンス全史』の世界的ベストセラー化で象徴される「ビッグヒストリー」への需要の高まりを特徴とする歴史ブームが起こっている。それは19世紀半ばに確立された精緻で厳格な実証主義に基づくランケ流の近代歴史研究が陥りがちなモノグラフ研究賛美と個別実証作業への埋没という歴史学界における近年の好ましからず傾向に突き付けられた「ダメ出し」と解釈しうる。職人的というべき丹念な実証主義的な事実確定作業が歴史研究の基本として不可欠であることに変わりはないとしても、歴史家はグローバルな出版市場で示された上述の批判の声に答える義務があるのは当然であろう。本稿は、従来本来的に哲学者の領分とされてきた歴史哲学ないし歴史理論に関する研究史を歴史家の側から概略しつつ、思想界における「言語論的展開」を契機に哲学者から提起された「歴史の物語り性」を発端とする歴史家と哲学者の論争に焦点を当てつつ、むしろこの批判的提案を歴史研究の軌道修正に活用すべきであるとの立場からこの論争の意義を再訪し、日々の歴史系授業での実践例も交えつつ、歴史の研究と学習の意義を再確認する試みである。